


今週のイチオシ 

日本の情報機関の中で、地味で影の薄いのが公安調査庁、通称ハム庁だった。どんな仕事の役所か、まず普通の人は知らない。この小説の主人公がそのハム庁調査官だ。世の通説に異を唱え、激変する新冷戦がハム庁を諜報戦の最前線へ押し出したとささやく。

手嶋氏はジャーナリストと作家の二刀流を遣い、虚実の味付けがまた玄妙である。語るドラマも過去形でなく、世界のどこかで近未来に生起する事件と回線が繋がっていると思わせる。フィクションの行間に、渦巻く国際情勢を読み解く鍵をそっと置いたりする。それが手嶋ワールドの手



鳴かずにカッコー

手嶋 龍一著

小学館 1870円

てしま・りゅういち 1949年北海道出身。作家、外交ジャーナリスト。著書に「ウルトラ・タラー」など。

ハム庁 諜報の最前線へ

法だが、今回は主舞台を内閣情報調査室や外務省国際情報統括官組織でなく、ハム庁にした意図に深謀がありそうだ。

しかし、真一文字に主題へ話を急がないのが手嶋流で、あちこちに楽しい道草。古今和歌集の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に 島隠れゆく舟をしを思ふ」が隠喩となり、京都・大徳寺の禅僧の墨蹟「明歴々露堂々」の掛け軸で、石州流茶道をひとくさり、など。

ハム庁の工作活動の要がヒューミント(人的情報収集)とコリント(諜報協力)。インターネットリジェンスの世界で力を発揮するのは、強制捜査権や逮捕権をもたないハム庁。(望月迪洋・ジャーナリス

国の情報機関MI6と交信できる技は、茶道や能・狂言、連歌や浮世絵など日本の伝統文化に通じた同調査官だけのもの。

日本近海や南シナ海に姿を見せて威圧する中国海軍の空母「遼寧」とは、実はソ連崩壊時にウクライナの黒海造船所で建造された航空母艦ワリヤーグの改造艦。その設計技師に主人公がアタックするヒューミント作戦の顛末が物語の本筋である。

ハム庁の前身は戦後まもなく設置された法務庁(法務省の前身)特別審査局。当時ここに陸軍中野学校や内務省特高などおぞましい戦前のお歴々が参集した。あれから七十余年、鳴かずに歳月を経て、新型コロナウイルス禍の危機下に、カッコーは思わぬ新任務を帯びて巣立ちを試みるのである。